



連載

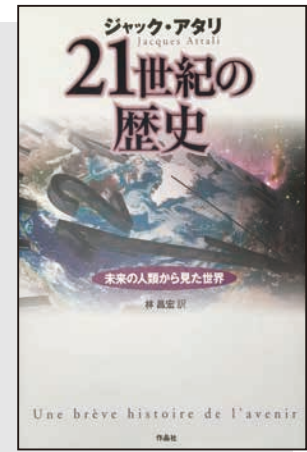
ビブリア・トーク
—私のオススメ—

… 池谷彰彦 (NEC 中央研究所)

21 世紀の歴史
未来の人類から見た世界

ジャック・アタリ 著, 林 昌宏 訳

作品社 (2008), 352p., 2,400 円 + 税, ISBN : 978-4-86182-195-0



本書はこれまでの人類の歴史を軍事、宗教、市場という観点から整理し、共通して見られる法則を洗い出した上で、21世紀がどんな未来になるのかを大胆に予想するというものである。

著者はフランスの経済学者・思想家のジャック・アタリ (Jacques Attali) 氏。ミッテラン (François Maurice Adrien Marie Mitterrand) 政権時に若干38歳で大統領特別補佐官に抜擢され、サルコジ (Nicolas Sarkozy) 大統領はアタリ氏をリーダーとしてフランス経済再生について議論する「アタリ政策委員会」を結成。名実ともに「ヨーロッパの知性」と評される人物である。

本書は2007年サブプライムローン破綻に端を発する世界金融危機を見事に予見した (原著は2006年出版) ことで、一躍ベストセラーとなった。我々人類はあれから10年分ほどの歴史をさらに重ねたが、その間に起きたことを振り返りながら改めて本書を読み返すと、彼の予見は色褪せるところか、その正しさを今なお証明し続けていることが分かる。ここでは、改めて彼の予見を振り返ってみたいと思う。

アメリカ帝国の終焉から多極型秩序へ

まず著者は2030年頃までにアメリカ一極集中の世界は終わりを告げると予見する。そのきっかけとなるのが金融危機である。具体的には、「アメリカ人世帯は担保物権となっている自宅の売却を余儀なくされ、アメリカの不動産価格は値崩れを起こす。こうして住宅の資産価値を基礎としたアメリカの金融信用機構は崩壊し、債務を抱えていた世帯は破産

する」と述べており、これが冒頭述べた、サブプライムローン破綻に端を発する世界金融危機を予見したくだけりである。興味深いのは、これは人類の歴史の中で世界の中心都市がヴェネツィア、ジェノヴァ、アントワープ、アムステルダム、ロンドン、ボストン、ニューヨークへと移ってきた際に起きたことと同じであり、歴史から見ると「必然的に起こる」と予見していることである (そして実際に起こった)。そして著者はさらにこう予見する。アメリカは国内問題 (インフラ整備、水・エネルギーの確保、膨大な借金返済など) に集中しだし、保護主義に走り、やがて世界から撤退する、と。まるで2017年1月に誕生したトランプ (Donald John Trump) 政権の登場を予想していたかのようにあり、著者の洞察力に感服するが、著者に言わせると、これもまた歴史から必然的に導き出された未来なのであろう。

その後、10から20カ国による多極型秩序によって世界は統治されるが、著者はこのような混沌とした状態は長くは続かないと予見する。強烈なリーダーシップをどの国も発揮できない状況で、やがて市場原理によって世界全体がコントロールされていく。いわば「超帝国」の出現である。

超帝国の出現

著者によると、超帝国とは「すべてマネーで決着がつく、市場主義が支配する世界」である。民主主義は雲散霧消し、国家権力は骨抜きとなり、稼いだものが勝ちという社会になる。この世界では、公共部門は解体され、医療、教育、社会保障といった公共サービス、さらには警察、軍までもが民営化され

る。著者はこのような世界が2040年頃に始まると予見する。

興味深いのは、超帝国の時代において、成長する産業の1つに保険業を挙げている点である（もう1つは娯楽産業）。国家が衰退すると、個人は生活のリスクを保険会社にカバーしてもらうようになる。やがて力を持った保険会社は、保険リスクを最小にするために、被保険者が規範に従った行動を顧客がとっているか（正しい生活習慣を行っているか、危険な運転をしていないか、など）を被保険者自身に証明させるようになるだろうと著者は述べている。具体的には、保険会社は自社の保険加入の条件としてウェアラブルデバイスやIoT（著者はそうは呼んでいなかったが）で取得した自己監視データの提出を被保険者に義務付けるようになるだろうとのこと。著者はまた、このような自己監視を人々はいとも簡単に受け入れるだろうとも述べている。なぜなら、人々はこれらガジェット（著者はフランス語でオブジェ・ノマドと呼んでいる）に対する漠然とした親近感、信頼感を持っているからである。

現在、ウェアラブルデバイスやIoTが急速に普及しているが、それがやがて自己監視につながり、そのドライビング・フォースになるのが保険会社であるという著者の洞察には一定の説得力があると感じるが、みなさんいかがであろうか。

超紛争から超民主主義へ

著者はその後、超帝国時代における度を超えた拝金主義に対する反動からの宗教戦争、資源争奪戦による地域紛争、貧困を逃れるための大規模民族移動による民族紛争などが頻発する「超紛争」に突入すると予見する。そして2060年頃に、利潤より利他、社会全体での調和を追求する「超民主主義」の誕生、その牽引者として「トランスヒューマン」という人々の登場を予見している。このあたりについては、また別の機会に論じさせていただければと思うとともに、ご興味のある方はぜひご自身で本書をご一読いただければと思う。

最後に、著者から読者へのメッセージを引用して、本稿を締めくりたいと思う。「本書の目的は、もっとも高い可能性をもって未来の歴史を予測することであり、筆者の願望を記述するといったことではない。むしろ筆者の思いとしては、我々の未来が本書のようになってほしくない、そして現在芽生え始めている素晴らしい展開を支援したいというものである」。

(2017年3月13日受付)

池谷彰彦 iketani@cp.jp.nec.com

NEC中央研究所 価値共創センター研究部長。社会問題、特に都市のインフラや交通の問題に取り組んでいる。博士(工学)。

